IFLAリヨン大会を振り返って

メタデータ	言語: 出版者: 日本図書館協会 公開日: 2024-01-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦,太郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000193

小特集★IFLA リヨン大会レポート

IFLAリヨン大会を振り返って

三浦太郎

大会概要

今年８月16～22日，「世界図書館情報会議（WLIC）：第80回 IFLA 年次大会」（IFLA リヨン大会）が現地国際会議場で開催された。テーマは「図書館，市民，社会：知識の合流」である。フランスでは第10回（1937）・第23回（1957）・第55回（1989）のパリ大会，第39回（1973）のグルノーブル大会以来，５度目の開催となった。

▲リヨン中央駅の大会案内

例年どおり，本大会では初日に分科会やグループの会合が設定され，翌17日に開会式が開かれた。大会参加者は120以上の国と地域から3,991名を数え，227のセッション（約半数は公開），108の企業展示ブース，ポスター発表193件が集まった。その後，参加者がダンスや食事を楽しんだ「文化の夕べ」（19日），定足数を満たした総会（20日），各種表彰が行われた閉会式（21日）などが続き，最終日の図書館ツアー（市内10，パリなど近郊都市20，スイス２の計32）をもって幕を閉じた。

アジアからは600名余が参加し，日本からの参加者も40名以上を数えた。このうち，河村宏氏（日本ライトハウス），杉本重雄氏（筑波大学）ら６名がセッション発表したほか，須永和之氏（國學院大学）ら８件のポスター発表（発表者は計19名）があった。今回はポスター発表の事前応募が200件を超えたため，いったん大会事務局から不採用通知が送られてくるケースもあったようだが，最終的に日本からの応募者は皆採用された。

IFLA トレンド・レポート

公開セッションのうち，ここでは，筆者も委員の一人である図書館協会運営分科会（MLAS）が，「情報への自由なアクセスと表現の自由に関する委員会」（FAIFE）と共同で開催した「次の段階は？ IFLA トレンド・レポートの先へ」（セッション172：20日9:30～11:30）の内容を，かいつまんで紹介しておきたい[1)]。

このセッションでは，昨年のIFLA シンガポール大会で発表されたトレンド・レポートに則して，情報社会で図書館の果たすべき役割が議論された。トレンド・レポートでは，情報環境の潮流を次の５点に集約している。

(1) トレンド１：新たな技術は，情報へのアクセス権をもつ人びとを，拡大させる側面と制限する側面をもつ
(2) トレンド２：オンライン教育は，グローバルな学習を，民主化する側面と崩す側面がある
(3) トレンド３：プライバシーとデータ保護の境界は，再定義される
(4) トレンド４：高度に結合された社会では，人びとの新たな声に耳が傾けられ，新しい集団が

より力をもつ

(5) トレンド５：グローバルな情報経済は，新たな技術によって変貌を遂げる

セッションでは，それぞれの視点について報告があり，とくにトレンド２については，スイス連邦工科大学ローザンヌ校（EPFL）のピアレ・ディレンバーグ氏が，MOOC（大規模オープンオンライン講座）の可能性を論じた。

それによれば，MOOCをはじめとするオンライン学習の登場により，これまで学習機会を持てなかった人びとが低コストで学べるようになり，他方，大学側にもトップダウンの教授法ではなく，ボトムアップで意見を集める仕組みが求められるようになった。しかし，60万人ともいわれる学習者の中には，人的交流（インタラクション）を求める傾向が強く，MOOCは現在，対面型授業の代替にはなり得ていないと言う。むしろ，多様な学びの広がる生涯学習での活用や，開発途上国での展開に可能性のある点が示唆された。

▲セッションの様子

学ぶために，もはや空間は阻害要因ではないし，高等教育機関もさらに変革を迫られてくるであろう。ただし今後，正規教育の仕組みとしてMOOCを活用するためには，認証基準に基づく質的保証の制度を整える必要があろうし，個々の学びの場面では，ときに他者と交流したり協同することを通じて身につくことがある点などにも，注意が払われる必要があると感じる。

討議ののち，主催者側のゲラルド・ライトナー氏（MLAS議長）は，IFLA各メンバーはトレンド・レポートの周知・広報を通じて，新しい情報環境の中で図書館界に何ができるかを議論していくべきだと述べた。それぞれの国や地域の状況を伝え合い，今後に向けた検討を重ねていくことは，国際会議に多くの人びとが集まる意義のひとつだと言えよう。

現地での日本人関係者の交流

会期中の８月18日には，フォッシュ地区のレストランLa Florentinにて日本人関係者34名による夕食会を開いた。開催にあたっては，事前に日仏図書館情報学会（SFJBD）会長の安江明夫氏と打ち合わせを重ね，事前に参加確認できた発表者の方々を中心にお声かけしていった。ただ，現地で初めて大会参加がわかった方も少なくなく，案内の至らなかった点は心残りである。

バカンスで休暇中のレストランも多いこの時期，予約に際しては，リヨン東アジア研究所図書館の山本みゆき氏に協力いただいた。山本氏には，本誌４月号にリヨン大会へのおさそい記事を寄稿いただくなど，お世話になった。この場を借りて，御礼申し上げる。

▲交流会ではリヨン料理を楽しんだ

また，IFLA大会終了後の10月４日には，日仏会館においてSFJBD 主催，日図協国際交流事業委員会共催による「IFLA報告会」を実施した。同会会員や一般参加者48名の方々にお集まりいただき，成功裡に終了したことをご報告するとともに，企画いただいた安江氏はじめ関係の皆さまに，改めて感謝申し上げたい。

MLAS分科会ミーティング

現在，IFLA分科会とコア・アクティビティには，日図協から10名の日本人図書館関係者が委員として参加している。2011年に委嘱を受けた委員は近く改選を迎えることになるが，各位にはご多用中のところご参加いただき，この場を借りて御礼申し上げる。

筆者の所属するMLASでは，14～15日にリヨン

市立図書館でプレ会議を開いたほか，20日に前述のIFLAトレンド・レポート関連のセッションを行った。また，16日12:30～15:00と21日8:00～9:30には，メンバーと各国図書館協会の代表らがオブザーバとして参加する分科会ミーティングが開かれ，さらに，19日16:00～18:00には関連セッションとして，ジェニファー・ニコルソンIFLA事務局長の主催する図書館協会会議（セッション153）も行われた。

一連の会議では，IFLA理事会（GB）報告，2014年２月の冬季会議の報告，関連の特別研究グループ（SIG）（新たな図書館員職グループ（NPSIG）と女性情報図書館グループ（WILSIG））からの報告，次回冬季会議の開催審議などがあった。

このうちとくに，16日の分科会ミーティングにはシニッカ・スピーラIFLA会長，ドナ・シーダー次期会長も出席し，在任中の活動と今後の方針について口頭報告された。また，引き続いてIFLA執行部のフィオナ・ブラッドリー氏から「強力な図書館協会設立（BSLA）プログラム」の状況が報告され，スチュアート・ハミルトン氏からは，知的財産権をめぐる世界知的所有権機関（WIPO）の動きと，情報へのアクセスと開発に関わる「IFLAリヨン宣言」[2)]の内容説明があった。

同宣言は，国連における2015年以降の開発目標「ポスト2015開発アジェンダ」において情報への自由なアクセスを盛り込むことを目指すもので，持続可能な開発と民主的社会の促進のために情報が不可欠であるとの認識に立ち，貧しい人びとをはじめとする世界中のすべての人が情報アクセスするための基盤整備を求めるものである（IFLAでは各国の機関に協力を呼びかけ，10月中旬の段階で，世界中の380機関がこれに署名している）。

来年はケープタウン

さて，21日の閉会式では，昨年，鈴木史穂氏（福島県立図書館）が受賞したことで記憶に新しい最優秀ポスター発表の表彰（ジュディ・ブルッカー氏が受賞）や，IFLAの活動に功労のあった人びと・団体への各種表彰があった。2005～08年にIFLA事務局長を務め，第74回ケベック大会（2008）では，現地で開かれた日本人関係者の交流会にも参加してくださったピーター・ロー氏にIFLAメダルが贈呈されたのは朗報であった。

また，2005～07年にIFLA会長を務めたアレックス・バーン氏には，IFLA最高の栄誉とされるIFLA名誉フェローの称号が授与された。会場に放映されたビデオレターのスピーチの中で，バーン氏が，「今年は体調の加減でIFLA大会に参加できなかったが，何十年か振りに家で誕生日を迎えることができた。家の者は『今年は珍しく，いるのね』と言っているよ」と話すと，会場は温かな拍手につつまれた。先人たちの献身的な努力によって，IFLAのような大きな国際大会が支えられていることを，実感させられる瞬間であった。

▲閉会式で紹介に応えるボランティア

大会には現地から300名以上の図書館員や学生がボランティアとして関わったが，スピーラ会長からねぎらいの言葉があった際は，各員総立ちとなり，この日一番の盛り上がりとなった。

最後に，来年は８月15～21日に南アフリカ共和国ケープタウンで開催される。2016年には米国オハイオ州の州都コロンバスで開かれることが決定している（８月11～18日）。IFLA分科会委員の方々をはじめ，現場の図書館員，大学の研究者，大学院生など，図書館関係の皆さまのご参加を，心よりお待ち申し上げております。

［注］最終アクセス日はいずれも2014年10月18日

1）各セッションの発表資料の多くは，IFLAホームページ「プログラムと会議録」［http://conference.ifla.org/past-wlic/2014/ifla80/programme-and-proceedings-full-printable.html］で見ることができる。

2）「The Lyon Declaration」（英語版）［http://www.lyondeclaration.org/］ 日本語訳には，日本障害者リハビリテーション協会情報センターによる「情報へのアクセスと開発に関するリヨン宣言」［http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/access/ifla/lyon-declaration_jp.html］がある。

（みうら　たろう：JLA国際交流事業委員会委員長，明治大学）

［NDC 9：010.6　BSH：国際図書館連盟］